

新型コロナウイルスの影響で、今年は全国高校総合体育大会（インターハイ）や夏の甲子園大会など、高校生の全国大会が中止になった。最後の夏を迎えた3年生は何を思うのか。宮城の高校を訪ね、生徒に思いを聞いた。

（スポーツ部・岩崎泰之、剣持雄治）

① 揺れる思い

高3 最後の夏

部活動の現場から

た。

新型コロナウイルスによる約2カ月に及ぶ休校措置が緊張の糸を断ち切った。学校を離れると、練習の厳しさや重圧ばかりが思い浮かんで嫌気が募った。競歩の選手は部で一人だけ。ネガ

仲間と共に再出発

引退したいかと監督に聞かれ、「はい」と答えた。もう受験勉強に切り替えよう。悩んだ末の考えだ。学校が再開した5月25日のことだった。

タイプな思考に拍車を掛けた。4月にインターハイ中止が発表されると、中学時代から自室に張っていた「インターハイ出場」と書いた紙をそと捨てた。

後悔しない選択

伊藤璃乃（18）は競歩の選手。仙台市青葉区の常盤木学園に通う。インターハイ常連の陸上部に憧れて入学した。1年の時は膝がうまく使えずいつも泣いていた。先輩の励ましに支えられ、2年で県高校総体を制覇。念願のインターハイ出場が懸かる今年はまだに勝負の年だっ

引退の意向を聞いた監督の遠藤ひろみ（53）は、あえて強く引き留めなかった。一人で取り組むつらさや、目標を失った無念さは理解できる。一方で陸上が好きなきこともよく知ってい

る。後悔しない選択をさせたくて「考えなさい」と時間を空けた。

校総体に代わる夏の代替大会に挑むと決めた。

授業が再開され、仲間たちと顔を合わせているうちに伊藤の気持ちは少しずつほぐれていった。「常盤木に入ったのは陸上

走る姿はたまに競歩っぽくなる。伊藤は「タイムが悪くてもいい。本気で自分に勝ちにいつて、やり切れたらそれでいい」と、照れくさそうに話す。

時間共有が励み

6月1日、部活が再開されると、そこに伊藤の姿があった。週末に髪を切り、表情は晴れ晴れとしている。練習が不十分な競歩ではなく、800円で県高

仲間元気つけられた選手は他にもいる。400円で昨年のインターハイに出場した同じ高校の竹内心良（17）は全国大会中



練習後のミーティングで監督の話を聞く伊藤。夏の大会に向け、仲間と共に再スタートを切った=6日、宮城県利府町の宮城スタジアム

止の悔しさをぐっとのみ込み、練習に励む。

休校中、部員たちは携帯電話でその日の自主練メニューを紹介し合った。顔は見えなくても同じ時間を共有している。それが励みだった。

竹内は400円と1600円のリレーでチーム記録を狙う。今年のメンバーは近年にない実力者ぞろい。団体戦となるリレーは走る方も、応援する方も力が入る。

「みんなと練習できるのもあと数カ月。一日一日を大切にしたい」

当たり前だった部活の時間が、今は何よりいとおしい。

（敬称略）